

駿河台分室物語

日本陸軍の秘密戦

原題:BUNKA CAMP STORY/ Secret War of the Japanese Army



のりざね

池田徳眞著

名倉有一 訳
名倉和子

「ペン画の上等兵」大野天橋は、1年半にわたり上海で挿絵入り伝単戦に従事した後、一九三九年4月に東京へ呼び戻された。参謀本部は次第に伝単戦の重要性を認識し、前述した4人の漫画家を雇い入れてインドとビルマを含む東南アジア諸国での独立運動のためのポスターと、大戦が始まった場合に初期の段階で使用する伝単の制作を開始した。さらにこの班（section）は伝単班事務所（leaflet section office）に発展した。一九四〇年8月に東京神田淡路町の荒井ビル（Arai Bld.）の3階を借り、2部屋の事務所で表札はカモフラージュのため「田中貿易」（Tanaka Trading Co.）とした。これがいわゆる「淡路町事務所¹⁸⁹」（“Awaji-cho Office”）である。注目すべきは、一九四三年11月に駿河台分室ができてそちらに移動するまでにこの伝単班が3年間に演じた役割である。

加田中佐¹⁹⁰が淡路町事務所の最初の長であった。彼は日本陸軍でもっとも博識な男として有名であった。偉大なる読書家で、軍事関係からその他の分野まで広い範囲のものを読むと言われていた。太平洋戦争開始と同時に始まった「香港攻略作戦」では参謀将校として目覚ましい働きをした。しかしながら実際に詳細な計画を立てこの事務所の漫画家を指導した参謀将校は藤野友市¹⁹¹少佐である。彼は後にF機関・・・以前述べた藤村氏のF機関ではない・・・の長となり、マレーやインドでの独立運動や独立軍（independent corps）の組織化を後方から操る上で積極的な役割を果たした。そしてその後藤野少佐の仕事を引き継いだのが、この物語にもっとも深い結びつきを持つ恒木少佐であった。

事務所の長である加田と参謀将校である藤野のほか、淡路町事務所に毎日出勤して現場の監督者を務める別の陸軍将校〔小岩井〕がいた。彼こそが日本の運命を大きく変えた日華事変の発端となった、一九三七年7月7日に北京郊外で起きた盧溝橋事件において、正に日本軍の中隊長だった人であった。太平洋戦争が始まると大隊の指揮官としてスタンレー山脈を越え、ポートモレスビーが見える地点まで進出して引き返した。そして前述したように駿河台分室が開設された際、13名の捕虜に対し、「協力を拒みたる者は、その生命を保証せず」と厳命した。実際、参謀本部は日本陸軍にとって最初の

¹⁸⁹ 「伝単作製のための事務所が創設されたのは昭和十五年八月で、神田淡路町の荒井ビルがこれにあてられた。これは参謀本部第八課に所属する秘密作業所であって、淡路事務所と称した」。〔前掲『心理作戦の回想』 p.89〕

¹⁹⁰ 本名は「多田督知」。以下の記述がある。「右〔淡路〕事務所創設当時の宣伝関係の参謀は多田督知中佐、藤原岩市少佐（共に進級）で直接の指導監督に当たっていたのは小岩井光男〔夫〕大尉（後少佐）であった」。〔同書. p.90〕

¹⁹¹ 本名は「藤原岩市」。〔同上〕

戦時宣伝機関である淡路町事務所へこうした一線級の将校を送り込んでいた¹⁹²。

太平洋戦争開始に至るまで淡路町事務所、通称田中貿易は対外極秘の方針をとっていた。部外者は一切事務所内への立ち入りを許されなかった。そしてこの事務所で働く者は、何か用事がある時はいつでも事務所の外、例えば近所の喫茶店で会うのがルールになっていた。漫画家は事務所の外で人に会う時、化粧品会社のデザイン部門で働いているとウソをついた。なぜなら田中貿易の中の彼らは、日本軍がマレーとビルマに進撃する際に使用する伝単制作に没頭していた。それで誰かに見られれば、日本軍の次の動きが容易に分かってしまう。だから小岩井少佐は毎日事務所に来て全面的な警戒を^{おこた}怠らなかつた。

こうして物語が進行していく。この事務所の漫画家の1人が陸軍に徴用された。小岩井少佐は欠員を埋めるため、大野氏と相談の上で松本¹⁹³という有能な漫画家を呼び寄せた。少佐は事務所近くの喫茶店でその漫画家と会い、事務所の説明をしてこう言った。

「ここへ来てわれわれのために働いてもらいたい」

漫画家が答えた。

「私はある新聞社の仕事で手一杯です。少し考える時間をいただけませんか？」

すると少佐は断固として言った。

「それは困る。参謀本部の秘密を打ち明けた訳だから、いずれにせよあなたには来てもらわねばならない」

こうして彼は淡路町事務所で働くことを余儀なくされ、戦争が終わるまでの5年間日本軍のために絵を描き続けた。松本は、池田にこう話した。

「少佐から話があった直後から憲兵が家の周囲をうろつき始めました。もし申し出を拒否したら陸軍から非国民の烙印^{らくいん}を押され、新聞の仕事を失うことは明白でした」¹⁹⁴

¹⁹² 「中野出身者としては、昭和十六年はじめより山口源^{ひとし}等中尉（乙Ⅰ長）、中期より草間孝次中尉（乙Ⅱ短）、谷山樹三郎中尉（乙Ⅱ長）、浜本純一中尉（乙Ⅱ長）等がこれ〔伝単制作〕に参画している」．〔前掲『陸軍中野学校』p.138〕

¹⁹³ 本名は「松下井知夫」．〔『日の丸アワー』p.31〕

¹⁹⁴ 「その淡路事務所に呼ばれたのは、昭和十六年の八月です。太田さんと、主管将校の人が来まして。当時ずっといろいろな新聞に仕事を持っていましたから、「とてもじゃないがそういう仕事はできない」と言ったんですが、しかし、「軍のこういう秘密を打ち明けたからには、どうしてもやってもらわなければ困る」と、まあ、こういうことなんです。だけど、「召集を受けて東京にいなくなれば別だけれども、そのままバツタリ新聞の仕事をしなくなったんでは、かえって疑われるでしょう」と言ったんです。「それなら午後からでも来て手伝ってくれればいい」という約束で、十六年の八月に、淡路事務所に入ったわけです。あとで聞くと、憲兵がぼくの身辺調査もしていたらしい」．〔松下井知夫. 前掲『新篇私の昭和史2』p.66〕

人を雇う時、これほど高飛車で理不尽な勧誘は聞いたことがない！ しかしこの話は参謀本部がいかに厳しく淡路町事務所の存在を秘匿し、予想されるアメリカやイギリスとの戦争に直面した日本の軍人がいかに張りつめた感情をもっていたかを示しているようだ。上述したように、彼らは大戦が起きるという予想の中、怪しい田中貿易で全力をあげて紙の爆弾を制作していたのだ。こうした伝単はすべて4～5色刷りで、葉書よりは少し大きかったが、ポスターよりははるかに小さかった。それらの伝単は人が秘密裏に運んだり、飛行機やその他の手段で大量に輸送したりする必要から、小さく作られていたのである。そして各種の伝単が、5千枚から数万枚作成された。淡路町事務所や伝単部で作られた伝単について本書に挿絵をすべて掲載するのは不可能であるからそれは省略し、書かれた宣伝文句を引用するだけで十分としよう。挿絵については読者のご想像にお任せする¹⁹⁵。

1 インド独立に関するもの

マレーにいる90万人のインド人を日本の味方につけ、同時にマレー駐屯イギリス軍に所属するインド人部隊に反乱を起こさせ、独立インド軍を組織する基盤として使う。

- a これ以上、イギリスの奴隷になるな！
- b アジアの人々の解放軍の進軍だ。
奴隷の鎖を断ち切り、独立への道を歩もう！
- c チャンドラ・ボースは立ち、巨大な獅子イギリスを斬った。(Chandra Bose rose and cut a big lion, Britain.) 彼に協力しよう。
- d 黄金の機会が訪れた。仲間内で争っている時ではない。団結し、独立のために戦おう。

2 マレー人に対するもの

- a イギリス人の作った鎖を断ち切ろう。
- b 全イスラム教徒の敵は誰か？ 君のすぐ後ろにいる。
- c 日本軍は、君のすぐ後ろに立っている本当の敵を撃つだろう。
- d イギリス・アメリカ海軍は、日本海軍により壊滅的敗北を被った。

しかしながら日本軍とアメリカ・オーストラリア軍の間でガダルカナル島における死に物狂いの戦闘が開始されると、伝単部は直接アメリカ・オーストラリア兵に散布する伝単に重点を移した。

¹⁹⁵ 資料例：平和博物館を創る会編. 紙の戦争・伝単:謀略宣伝ビラは語る. エミール社, 1990. なお池田は敵側の資料として、鈴木明・山本明編著. 秘録・謀略宣伝ビラ—太平洋戦争の紙の爆弾. 講談社, 1977. を挙げている. [『プロパガンダ戦史』 p.147]

するがだいぶんしつものがたり
駿河台分室物語
にほんりくぐん ひまつかん
日本陸軍の秘密戦

【原題： *Bunka Camp Story/ Secret War of the Japanese Army*】

非売品

作成地：静岡県浜松市.

作成年：2015年.

増刷①：2018年.

増刷②：2020年.

著者：池田徳眞.
いけだのりさね

翻訳：名倉有一，名倉和子.
なぐらゆういち なぐらかずこ

E-mail: nagura95@gmail.com

© 池田徳眞 1964.